

- 芝原靖男（62）：瑛美が卒業した中学校の現校長
 - 美濃田麻美（613）：美濃田の娘、中学一年生
 - 美濃田愛海（636）：美濃田刑事の妻
 - ケイ／江畑篤瑠（619）：コンビニ店員
 - 千原望海（628）：千原の妻
 - 江畑桐子（654）：美知瑠の母親で、公認会計士
 - 江畑哲朗（655）：美知瑠の父親で、開業医
 - 江畑美知瑠（615）：16年前に自殺した女子中学生
 - 草野（627）：刑事②、男性
 - 美濃田（641）：刑事①、男性
 - 泊恒雄（656）（40）：謎の男
 - 千原（632）：瑛美の隣の部屋に住む男性
 - 小野松瑛美（631）（15）：看護師
- 【主要登場人物】

○ とある街の雑踏（朝）
 ○ ある街の雑踏（朝）
 ○ 向かいから、ボサボサの髪でいる。
 ○ 言を、O L 風のがら歩く女を視界に捉えり
 ○ 同様に他の通行人も女を避けて歩く。
 ○ 別の街の雑踏（朝）
 ○ 通勤中の通行人が数多く歩く中、小野
 ○ 歩松瑛美（31）も人波に合わせ早足で
 ○ 瑛美の勤務先の病院（朝）
 ○ 中規模のケアミックス型病院の外観。
 ○ 数名の職員が出勤し、建物に入って行
 ○ 六名の看護師が詰所に備品の準備や
 ○ 電子カルテを操作しながら看護業務を
 ○ たこなす中、瑛美もテキパキと業務にあ
 ○ 同・病院の職員食堂（昼）
 ○ 瑛美と高田（29）が四人掛けのテー
 ○ 男性・高田（29）が四人掛けのテー
 ○ ブルで昼食をとりながら雑談中。
 ○ 高田君、もうだいたい慣れた？
 ○ 「そうですね、前の職場より馴染みやす
 ○ いですし、なんとか。皆優しいですし
 ○ ね。」
 ○ 「若いし、体力あるもんね、高田君」
 ○ 「確かに。助かる。」
 ○ 「いやいや、普通ですよ」
 ○ 「いやいや、部活何やってたの？」
 ○ 「中学生時代、サッカー部でした」
 ○ 「笑いながら」 ああ、ぽいわ」

高田 「(笑いなながら) ぼいですか？」

里美 「ぼいぼい！ 大学は？」

高田 「適当にサークル掛け持ちして遊びまくってましたよ」

里美 「(にやりと笑いなながら) ああ…いわゆる」

高田 「いわゆる？」

瑛美 「チャラ男だ」

高田 「(顔の前で手を振り) 違います！」

里美 「自分で遊びまくってたって言ったんじゃない」

高田 「健全な遊びですよ。お二人は学生時代何してたんですか？」

里美 「私はテニス」

高田 「…ぼいっすね」

里美 「(目を細めて) それ、喜んでいいやつ？」

高田 「勿論っすよ。瑛美さんは？」
瑛美、少し俯き、暗い表情。

※ ※ ※
(フラッシュ)

古びた廃墟、床に倒れ込んでいる制服姿の女子中学生。その周りを取り囲む数名の不良風の女生徒や、私服の十代の男性達。

※ ※ ※

瑛美 「特に何も。部活やったことないんだよね」

里美 「あ、そうなの？ 意外！ てっきり体育会系バリバリだと思ってた。めっちゃテ

キパキ働くしね、瑛美」

高田 「ほんとおつすよね」
瑛美 「そんな昔の話いいじゃん、大事な今は

今だよ、今」

里美 「(深い溜息) はああ…素敵な素敵なパートナーはおらんもんかね」

瑛美 「あと目の前のボーナスもね」

里美 「(瑛美を指差しながら) それな？」

高田 「いいなり！僕対象外なんですよ：何か
 高田 「おごつて下さいね」
 里美 「婚活の為の戦利品とか買い込んで、
 余ったら、ね」
 高田 「あの、失礼ですけど、お二人とも彼氏
 いないんですか？」
 里美 「（笑いなながら）そんな直球に聞く？
 いないよ」
 瑛美 「私も」
 里美 「でも、瑛美はそもそも可愛いし、私服
 もめっちゃオシャレだし、料理上手、
 あの家に招いたら勝ち確でしょ？」
 瑛美 「そんなことないよ。実際だいたい長いこ
 と一人だしね」
 高田 「（二人を交互に見ながら）家って？」
 里美 「瑛美の家、デザイナーズマンションで
 めーっちゃオシャレなんよ。しかも、
 いながら）ちよっとブツ飛んでる
 よね、あの部屋」
 瑛美 「（微笑みながら）確かに、ちよっと変
 わったつくりではあるかな？でも結構
 気に入ってるけどね」
 高田 「（テーブルに体を乗り出し）何すか？
 それ」
 里美 「いや、見てのお楽しみ！今度瑛美の家
 で宅飲みしようよ！」
 瑛美 「私は全然いいよ」
 里美 「超防音だからね、宅カラ出来るよ！」
 高田 「（目を見開き）た、宅カラ！？」
 瑛美 「（思い出し笑いし）あれ笑った。
 里美、歌うどころか最後ダンスし
 てたもんね」
 高田 「（笑いなながら）何すかそれ、めっちゃ
 行きたいです」
 里美 「ボーナス入ったらパーッとね」
 瑛美、壁掛け時計の時間を確認する。
 瑛美 「そろそろ戻ろっか。午後から欠員出て
 るし、早めにやっちゃお」
 高田 「（時計を見て）そうすね」
 里美 「行こ行こ、ノー残業で今日は帰るよ」

（笑

三人揃って席を立つ。

○

瑛美の自宅マンション・外観（夜）

十五階建てのマンションの構造で、三
部屋、

が並んでおり、向かいの奥に一部屋、

○

瑛美の自宅マンション・廊下（夜）

※並んだ部屋のうち、中央が瑛美の

鍵穴に鍵を挿しドアを開けようと

瞬間の落書きがさされていることに

く。印刷の書きがさされていることに

指で赤い丸に指で赤い丸に指で赤い

怪訝な表情で周囲を見回すが、誰も

首を傾げながらドアを開け、部屋の中

○

瑛美の部屋（夜）

瑛美の部屋（夜）

ロックスを掛ける。

部にLの廊下を抜けると

リビッドグアを開けると寝室がある。

イビッドグアの電気を点け、カバンを

リビッドグアの電気を点け、カバンを

入浴中の瑛美。

○

同

入浴中の瑛美。

急いで浴室を出るが、誰もおらず、部

屋にも特に変化は無い。

○ 同・リビング（夜）

瑛美、半乾きの髪をタオルで拭きながら、スマートフォンでネットショッピングの画面を開く。アクセサリーショップのサイトで、あるアクセサリーを物色する。

○ 同・エントランス（朝）

管理人男性が共用部を清掃している。瑛美、そこに通りかかる。

瑛美 「おはようございます」

管理人 「（振り向いて）ああ、おはようございます。います。行ってらっしゃい」

瑛美 「あ、あの」

管理人 「はい？」

瑛美 「何か、私の部屋のドアの覗き穴に、赤い丸印みたいなのを書いてあったんだ。すけど、ご存知ないですか？」

管理人 「（スマホの画面を凝視し）いえ、知

りませんよ。共用部は私らの管轄ですけど、特に何も聞いてません」

瑛美 「イタズラですかね？」

管理人 「子供の落書き：ではないですよ、高さからして」

瑛美 「配達員か何かがおたくに来て、不在だったから書類に赤マルを書こうとしたら、ドアにインクがうつつ

しちゃった：とか？」

瑛美 「でも：わざわざ覗き穴の上で書かないですか？」

管理人 「だよえ：後で各階掃除に行くから、そのときに消しておくよ」

瑛美 「十階です。〇一六号室」

管理人 「わかりました。気味悪いねえ。また何かあったら言っ

瑛美

「はい。管理人がとうございます」
 瑛美、管理人に会釈をし、その場を後
 にする。集合ポストに立ち寄り、自室の部屋番
 号のポストを確認すると、チラシ類が
 複数入っているのを確認すると、
 マンションを出ていく。作業服姿の男性
 がマンションに入っ、作業服姿の男性

○

瑛美の自宅付近のコンビニ（夜）
 瑛美の自宅マンションから徒歩数分の
 コンビニエンスストア。から徒歩数分の
 瑛美、レジに買い物かごを置く。
 マスク姿で、リストバンドを着けた派
 手なメイクの若い女性店員、江畑篤瑠
 （19）が接客をしている。

※篤瑠の胸の名札には『ケイ』という
 名前が手書きで書かれている。

篤瑠

「ありがとうございました！またお越
 瑛美、コンビニ袋を提げ、退店する。

○

瑛美の自宅マンション・集合ポスト（夜）
 瑛美が集合ポストで自室の部屋番号の
 ポストを覗き込むと、今朝入っていた
 チラシ類が全てなくなっている。誰
 驚き、反射的に周囲を警戒するが、誰
 もいない。

○

瑛美の勤務先の病院・職員食堂（昼）
 四人掛けのテーブルに座る瑛美・里
 美・高田・高田。里美、深刻な表情。
 「ありませぬ」
 「でも：ポストのチラシ盗られたぐらい
 瑛美

里美「あ、もし見つめる。何かを思い出すように宙を
 里美「郵便物泥棒？」
 里美「（首を横に振りながら）ちっがう！
 ポストってさ、個人情報、宝庫じゃ
 ん。その人の名前、職場、家族関係と
 かさ、役所からのハガキとか」
 高田「（何度も頷きながら）確かに」
 里美「しかも、ポストの中身の回収頻度とか
 いうしさ」
 里美「じゃあ、赤い丸印は？」
 高田「うん、この家が狙いやすい、みたい
 なマークキング？」
 高田「何か、町のグランドファイアーとかで
 もそんな入りやすかったよね。この家は
 空き巣に入ったりすいた目印」
 里美「でもさあ、うちオトロクマン
 ションだし、ポスト見なくて生活習慣把握
 してるなら、印いらなくない？」
 里美「そりや、警察に相談したら？」
 赤マルとポスト泥棒だけじゃ動いてく
 れないんか？
 高田「でも、何かあったら遅いでせ
 う、ん、衛生、泥棒にせよ！」
 里美「よう、自分で泥棒にせよ！」
 里美「そ、うだ、ね、変な相談しちやっ
 ぐめんだね、全然。対処して、楽しんで！」
 高田「そ、うだ、ね、早くも念のボ、ナ
 瑛美さん、ボ、ナス何に使うんです
 か？」
 瑛美「私、あんまり物欲ないんだけど、今回
 はネットスクレを買っちゃおうかなって」
 瑛美「ネットショップに自宅で
 閲覧していたネットショップに自宅で」

トの画面を開き、二人に見せる。

里美 「かわいいじゃん！」

高田 「瑛美さん似合いそうっすね」

瑛美 「ほんど？じゃあ絶対これ買おうよ」

里美 「（自分のスマホを開き）私もネットで

何か買おうかなあ」

瑛美 「私、最近ずつとやってるよ。やりすぎ
てスマホの動作ちよつと重くなってる
気がするもん」

高田 「（笑いながら）それはやりすぎっす」

里美 「あ、瑛美って明日オフだよね？」

瑛美 「そうだよ？」

里美 「これは：明日家でポチっちゃうな？」

瑛美 「：（笑いなながら）ありえるかも」

○ 瑛美の職場からの帰路（夜）

瑛美、自宅へ向け歩道を早足で歩く。

泊恒雄（56）が側道に腰掛け、手元
のスマホを操作している。腰掛け、手元
目の前を瑛美が通り過ぎると、泊は不
気味な笑みを浮かべる。

○

瑛美の自宅マンション・部屋（夜）

瑛美、コンビニの袋を提げ、部屋に
入ってくる。帰宅する。袋を置き、バツ
リビングの電気を点け、ダイニング
テーブルに座り、スマホを取り出そうと
ソファを探ると、ミヤグサの花弁が
一枚紛れ込んでいるのを見付ける。花
弁を摘み、ゴミ箱に捨てる。不思議そうに
眺めた後、スマホのバイブが鳴る。
バッグの中、スマホのバイブが鳴る。
スマホを開くと、SNSにフォロワー
クエスチョンが来ている。リアルアベツ
ユーズの名はデタメなアイコンも
トの羅列、はプロット画像。アイコンも
初期設定のシルエット画像。

怪しんだ瑛美は、『リクエスト拒否』をタップする。その途端、同様の怪しげなユーザーからフォロワーリクエストが十五件くる。

※うち半数のプロフィール画像は同じシルエット画像、残り半数は雑多な風景写真の画像。

瑛美「（険しい表情で）なに、これ…」

瑛美、SNSの通知をオフにする。同時に、玄関の外で物音が聴こえる。瑛美、玄関へ移動しおそるおそる玄関の覗き穴を覗くが、誰もいない。チェーンロックをしたままドアを開けると、置き配で段ボールがドア前に置かれていた。ドアを少し開け、段ボールを回収し、リビングのダイニングテーブルで開封すると、中から瑛美がネットショッピングチケットしていたネットレスが入っていた。瑛美、思わずネットレスを床に放り投げた。

○ 病院の職員食堂（昼）

里美と高田がテーブルに着き談笑しながら昼食をとっている。瑛美からの着信が入る。

里美「はーい、電話に出る。」
瑛美「ごめんね、お昼に。あのね、昨日見せたネットレス、私宛てに送ったりしてないよね？」

里美「あ、の意味が分からず眉を顰める。」
瑛美「（慌てた口調で）私の家に！」

里美「（笑いながら）え、何で？そんなことするわけないじゃん。ちらっと見ただ

瑛美 「ごめん、高田君そこにいる？」
 瑛美 「うん、一緒だよ？聞いてみよっか？」
 瑛美 「お願い！」
 高田 「しかける。里美、スマホを耳から放すと高田に話
 高田 「聞こえてましたけど、僕じゃないっす
 里美 「だよ、ごめんね」
 里美 「再びスマホを耳にあてる里美。
 里美 「違うってさ。そりゃそうだよ。なに、
 瑛美 「もうん：昨日の夜に、置き配で」
 瑛美 「他の友達とか？誰かに見せたりしてた
 瑛美 「ないの？」
 瑛美 「ううん、二人以外には、誰にも見せて
 里美 「ないよ」
 里美 「注文したの誰か聞いた方がいよいよ」
 ○ 瑛美の自宅マンション・部屋（昼）
 瑛美 「（困惑した様子で）はあ！？」
 瑛美 「えと：ですから、お客様ご自身でご注
 文なさっておりますが：」
 瑛美 「（驚きながら）私が！？」
 瑛美 「はい。オノマツ・エミ様でいらっしや
 瑛美 「はい：」
 瑛美 「ご自身のIDからお申込みいただいて
 瑛美 「おりますが：」
 瑛美 「（困惑し）そう仰られませんでした！」
 受付 「（困惑し）そう仰られませんでしたも：正規
 の手続きでご購入いただいたものです
 ので、私共は何とも：」

瑛美 「（少し考え）スマホの乗っ取りとか、

受付 同じような事例って今までなかったで

「そのような事例は聞いたことがござい

ませんか。：何より、スマホの乗っ取

りなら、代金はオノマト様ご負担にす

るはずじゃありませんか？」

瑛美 「誰かが勝手に注文して、代金まで払っ

たってこと？」

受付 「ええ、ご注文確定と同時に、お振込み

瑛美 「いた、ご注文確定と同時にお振込み

「どうしたらく考え込む。」

「どうしたらいいんですか？」

瑛美 「それ以外の事は、私共では何とも：」

受付 「通話を終了する瑛美。共では何とも：」

「置き配されていた段ボールごと、ゴミ

箱に突っ込む。そのままソファに横たわ

る。溜息をつき、そのままソファに横たわ

る。溜息をつき、そのままソファに横たわ

る。溜息をつき、そのままソファに横たわ

る。溜息をつき、そのままソファに横たわ

○ 同・部屋（夕）で目が覚め、慌てて起き

上がる。ソファで目が覚め、慌てて起き

キツチンへ歩き、冷蔵庫を開ける。

閑散とした冷蔵庫の中身を見て、溜息

をつき、財布をバッグから取り出すと

玄関へ向かう。バッグから取り出すと

○ 同

瑛美の乗るエレベーターが一階に到着

エントランスに駆け上がり、瑛美の

ふと、集合ポストに立ち寄り、自室の

部屋番号のポストを確認すると、ちら

シ類が複数入っている。脇にある

共用のダストボックスにそれらを破棄

○ 瑛美の自宅付近のコンビニ（夕）

瑛美を隠し撮りした写真が掲載されて
いた。

○

同
瑛美、エレベーター（タ）
ぶ。美、一階に到着したエレベーターを呼
ぶ。込むと閉まり、扉ボタを連打する。乗
り込が閉まり、エレベーターが上昇し
ていく。閉まり、エレベーターの防犯窓から、各階の廊
下が一瞬見える。防犯窓から、各階の廊
下階段に差し掛かると、廊下で、廊下で
九階が不気味な笑みを浮かべている姿が
泊犯窓から一瞬間見える。十階に着し
瑛美、エレベーターになり、十階に着し
たエレベーターのドアに体を押し込み
開扉すると、廊下に飛び出す。押し込み
エレベーターの非常階段を登る足音
音が聞こえる。脇の非常階段を登る足音
走る。聞こえる。脇の非常階段を登る足音

○

同
瑛美、部屋の前の共用部廊下（タ）
鍵を開け、ドアを開くと、急いで玄関
に入り、瞬間、ドアを閉じかける。靴をド
次の瞬間、廊下から泊が現れ、靴をド
アに挟み、ドアを強引にこじ開けよう
とす。悲鳴をあげながら、両手でドア
を閉じようとする。笑みを浮かべながら、ド
アを力任せに揺すつている。廊下で、ド
アの下に、千原（31）が現れる。

千原「（泊の肩を掴み）おい、あんた何やっ
てんだ！」

泊と千原が揉み合いになる。ドアは揉
み合いの末に開き切った状態。ドアは揉
み、腰が抜け、玄関にしりもちをつ
くと、蹲り頭を抱える。

泊、隙をみて千原を突き飛ばすと、非常階段を駆け下りていく。千原、玄関で蹲る瑛美に声をかける。「あの、大丈夫ですか？」

千原 「あつと千原を見上げ）はい…大丈夫です：ありません」

瑛美 「はつと千原を見上げ）はい…大丈夫です：ありません」

千原 「とりあえず、警察を呼びましょう」千原、ポケットからスマホを取り出すが、瑛美が千原の腕を掴み制止する。

※千原の右手人差し指に金の指輪

瑛美 「待って下さい。警察はちよつと：」

千原 「（驚きながら）どうしてですか？」瑛美 「（俯きながら）まだ、今すぐ応対できる気がしなくて：」

千原、腕を掴んだままの瑛美の手をそつと解く。

○ 同…一階共用部のソファ（夜）

瑛美と千原、共用部のソファに向かい合わせで座る。

千原 「そんなことがあったんですね」

瑛美 「（俯いたまま）はい…」千原 「怖かったでしょう」

千原 「僕は、千原といえます。小野松さんの隣の部屋に住んでるんで、また何かあったら言つて下さい。独り身です仕事も自由が利くんで、何かと動きやすいとします」

瑛美 「（会釈し）ありがとうございます。」

千原 「いえ。最近越してきたばかりです」

瑛美 「そうですか。本当に、ありがとうございます。つちやつて。すみません、話聞いてもら

千原 「いえいえ、大丈夫ですよ。落ち着かれ

瑛美 「もうちょう少着いたら自分で電話します」

千原 「大丈夫ですか？自分でも電話します」

瑛美 「僕にも顔を見られたし、もうここま

千原 「派手にこのあたりに歩かすよ、はな

瑛美 「は、はい、揃えておいた方がい

○ 同 数日瑛美の部屋・リビング(朝)

千原 「購入も防犯ブザーは必需品です。

瑛美 「防犯ブザーの取り扱い説明書を

千原 「次に催涙スプレーです。今日み

「ないに、変質者と至近距離で揉み合

「けよう。相手が怯んで、押し続け

「み続けな。強さもない。好まないので

瑛美 「購入しないようには違法なので

を、確認する。プレールのラベルや射出口

ダミーカメラを設置する。

○ 同・瑛美の部屋の前、廊下共用部（朝）

瑛美、バッグを肩にかけ、玄関を出て
ドアを施錠する。
千原、同じタイミングで隣室から出てくる。

瑛美に気付くと、会釈する。

千原 「（にこやかに）おはようございます」
瑛美 「（会釈しながら）あ、おはようござい

ます！」

二人並んでエレベーターに向かい、
廊下を歩く。

千原 「お仕事ですか？」

瑛美 「はい。千原さんは？」

千原 「いや、僕は今日は休みで、ちょっと

買い物に」

エレベーター前に到着し、千原が下り

のボタンを押す。

千原 「その後、どうです？」

瑛美 「おかげさまで、ぱったり何もなく、

平和ですよ」

千原 「警察には通報したんですか？ 実は：

あの後、ちよつとだけ廊下に警察来る

んじゃないかかって聞き耳立てました」

無人のエレベーターが到着し、二人並

んで乗り込む。ボタンを押すと、エレベ

ー千原、一階のボタンを押し、エレベ

ー千原の日は夜遅く閉まり、降り始める。

瑛美 たんで、仕事終わりに自分で警察署に

行ったんで、仕事終わりに自分で警察署に

行つたんで、仕事終わりに自分で警察署に

千原 「そうでしたか。警察は何て？」

瑛美 「巡回を、増やして、警察は、どうです、

千原 「それを、下さ良かっ。とはいえ、

瑛美 「はい、あります」

エレベーターがとうございませす」

二人並んで階段に到着し、エン

出る二人。別々の道へ分かれる。外へ

瑛美 「あ、私こっちは」
 千原 「ああ、僕はこっちは」
 瑛美 千原、瑛美に背を向ける。

千原 「(慌てて) あ、あの！」
 瑛美 「(振り返り足を止め) はい？」
 瑛美 「今度、お礼を、したいんですけど、
 ダメですか？」

千原 「お礼？」
 瑛美 「はい、助けてもらったし」

瑛美 「はい、バッグに取り付けた防犯ブザー
 を千原に見せる。」

瑛美 「防犯グッズも！」
 千原、優しく微笑む。

○ 瑛美の勤務先の病院・職員食堂(昼)
 四人掛けのテーブルに座る瑛美・里
 美・高田。不機嫌な表情の里美。

瑛美 「(戸惑いながら) え、なに？」

里美 「ストーカー事件が解決したのは本当に
 良かったと思おうよ？でもさ、なんなの
 そのドラマチックな白馬の王子様との
 出会い！ドラマじゃん！」

瑛美 「私に言われても困るよ：私だってビッ
 クリなんだから」
 里美 「ズルい！私の両隣なんて、単身赴任の
 オジサンとガリガリのニートみたいなの

高田 「眼鏡のいちやんなんだからね！」
 「うわあ、くそも白馬に乗ることすら
 叶わない属性じゃないすか」

里美 「(高田を睨み) 今、何か言ったか？」

高田 「いえ、僕、喋ってません」
 瑛美 「でも、まだ全然分かんないよ。今度、
 ご飯行くだから」

里美 「いや、イケるよ。危険な状況で出会っ
 た二人、相手はワイルド系のイケメ

高田 「でも：恋人が隣の部屋、すぐだよ！」
 「イヤかもしれないすね」

瑛美 「(高田を睨み) 今、何か言ったか？」

美濃田 「美濃田、鼻で笑うか」
 草野 「いや、シボい事件ばっかりかな」
 美濃田 「暇なのか？ そんなに平和かな」
 草野 「で、報告書に決まってるが」
 美濃田 「（草野の視線に気付き）何だよ？」
 草野 「いや、何しておられるのかなあと」
 警察署・デスク（昼）
 田隣イ散警路台きエ瑛美
 ののピら察署の自の自
 パデングか署の吹ク（昼）
 ソグすたのスキ抜けのフロア。
 コクする美濃田刑事（27）が美濃
 の草野刑事（41）をタ
 軽トせ運んで停車している。
 瑛美の自宅マンション・外観（昼）
 瑛美 「あ、本当だ！ へ、片方の部屋、
 瑛美 「気が早いよ！ 三人！」
 高田 「うん、ありがとう」
 里美 「褒美かもね」
 高田 「でも、さ、冗談抜きで、ほんと良かった」
 高田 「いえ、僕さっきからずっと聞いてるだ」

草野 「（聞き辛そうに）最近どうですか？」

美濃田 「最近の若者は、そんな主語の無い立
 会話でコミュニケーションが成り立
 つのか？」

草野 「美濃田さんは美濃田さんで、主語が
 でかいですよ」

美濃田 「うるせえな、仕事しろ」

草野 「（真剣な表情で）いや、一応…心配
 してるんです：僕なりに」

美濃田 「美濃田、パソコンを打つ手を止め、
 草野に体を向ける。」

美濃田 「すまん」

草野 「いえ、すみません。自分独りもんで
 すし、何て言ったらいいかわからな
 くて」

美濃田 「心配すんな。ずっとこのままって訳
 でもないだろ」

草野 「今そこまで忙しいんで、早く
 帰ってあげて下さいね」

美濃田 「そうだな。そうするか」

美濃田 「再びパソコンに向かう美濃田。
 ふと、手を止める。」

美濃田 「草野」

草野 「はい」

美濃田 「お前は仕事しろ」

草野 「美濃田、
 慌ててデスクに向かう草野。美濃田、
 微かに笑みを浮かべながら仕事を続け
 る。」

○ 瑛美の自宅マンション・部屋（夜）
 瑛美、寝転ぶ。スマートフォンを消し、ベッド
 に寝る。起す。ホを開き、LINE
 アプリアを起動する。最後に送った
 千原とのメール、最後の状態に送った
 瑛美のメール、I N Eはまだ未読の状態で、
 電気を点けると、境の壁に耳を当ててる。
 千原の部屋との境の壁に耳を当ててる。
 何のも聴こえず、溜息をついてベッドに
 戻り、目を閉じる。

※ベッド下のベッドフレームが映る。
閉められたカーテンの僅かな隙間から
泊がベランダに佇み、瑛美を凝視して
いる。

○ 瑛美の勤務先の病院・詰所（朝）

七名の看護師が詰所で業務をこなす中
瑛美が電子カルテを見ながら作業して

いる。

里美、背後から声をかける。

里美「その後、どう？」

瑛美「（一瞬驚き）わっ。ああ…ダメ、返信

こないよ」

里美「隣に住んでるんなら、いるかいなにか

分かるんじゃないの？」

瑛美「帰ってきてる気配ないんだよね…仕事

が忙しいのかも？」

里美「でも、約束って今日の夜でしょ？この

まますっぽかすなんてひどくない？」

瑛美「もう少し返信待ってみるよ」

里美「すっぽかされたなら、今晚ヤケ酒付き

合うよ？」

瑛美「ありがとう。でも、急に連絡来るかも

しれないから、待つよ」

里美「健気だねえ。無理すんなよー」

瑛美「ありがとう。（微かに笑いながら）

明日めちやくちや荒れてたら慰めて」

里美「（何度も頷き）もちろん！」

業務に戻る二人。

○ 同・女性更衣室（朝）

職員専用の更衣室。

既に出勤した者と、夜勤明けの者、

どちらもおらず無人。

ゆっくりとドアが開き、何者かが

入ってくる。

瑛美のロッカーの前まで迷わず歩くと

その場にじっと佇む。

○ 瑛美の自宅付近のコンビニ（夜）

瑛美、酒類のコーナーで商品を選ぶ。
 篤瑠、真後ろで商品の陳列を整える。

※篤瑠、不自然に瑛美のバッグに
 体を近づけるが、瑛美は気付かない

瑛美、商品をカゴに入れ、レジに向かう。
 中年の男性店員がレジ対応をしている中、溜息をつく瑛美。
 店員「ありがとうございます！またお越し下さいませ！」
 コンビニ袋を提げ、退店する瑛美。

○ 瑛美の自宅マンション前の歩道（夜）
 瑛美、コンビニ袋を提げたまま、とぼ

とぼ歩く。
 ふと背後で足音が聞こえ、振り向くと泊が真後ろに立っており、不気味な笑みで浮かべている。

瑛美「（恐怖に引き攣りながら）ひっ！」

恐怖で声が出ない瑛美、急いで踵を返すと、自宅マンションへ向け走り始める。
 背後から早歩きで追い掛ける泊。
 瑛美、走りながらバッグの中を探る。
 が、パニックになりうまく中身が探れない。
 周囲を見回すが、通行人がいない。
 振り返ると、泊が少し近づかず距離を縮めながら不気味な笑顔を浮かべたまま近付いてくる。

○ 瑛美の自宅マンション・エントランス（夜）

瑛美の自宅マンション・エントランス（夜）
 に辿り着く。
 ようやくバッグから鍵を取り出すと、エントランスを開錠し、エレベーターへ急ぐ。
 エレベーターに乗り込み、上昇ボタン

瑛美 「えっ！」
 開くと、泊が現れる。
 寸前、エンターの自動ドアが再び
 瑛美の乗るエレベーターの扉が閉まる
 瑛美、男が何故敷地内に入ってこれる
 のか理解出来ない、パニックになる。
 泊が歩み寄るが、寸前でエレベーター
 の扉が閉まる。
 瑛美、バッグの中を探るが、スマホが
 見付からない。

○ 同
 瑛美、急いで自室に逃げ込み、ドアを
 施錠し、チェイストを掛ける。ドアを
 急いでバリバンの音で、電気を点け
 改め、バッグの中を荒々しく探るが、
 どうしてもスマホが見付からない。
 背後、ドアを激しくノックする音。
 パニックになり、音が向く。
 ドアの鍵が、カコンと音を鳴らし開錠
 する。

瑛美 「目を見開き」きゃあああああ！
 瑛美、パニックになり、バッグを逆さ
 まにして中身を全てダイニングテーブル
 ルの卓上に落とす。
 防犯カメラを手に取り、ピンを抜くが
 音が鳴らない。
 続いて催涙スプレーを手に取り、宙に
 向け発射してみる、何も射出されな
 い。
 慌てて部屋の隅にあるノートパソコン
 を起動させるが、何も反応しない。

瑛美 「取り乱しながら」何で？何で？
 突然、携帯電話の着信音が鳴る。
 びくっと驚きながら、音の鳴る方向を

泊瑛美 「やあ」
 泊瑛美 「(怯えながら) …誰? 何なんですか!」
 泊瑛美 「何がしたいんですか!」
 泊瑛美 「まあ落ち着きなよ」
 泊瑛美 「:」
 泊瑛美 「まず、自分の置かれてる状況を理解して下さいよ」
 泊瑛美 「は?」
 泊瑛美 「スマホは預かってます。バッグの中は取り出しやすい場所に入れておくのは賢いけど、かえって盗みやすいんだ。パソコン、火災報知器も動かないようにしておいたよ。外と連絡を取る手段はない。これかも、着信専用のプリペイドスマホだから、かけられないよ」
 泊瑛美 「: 何がしたいの?」
 泊瑛美 「瑛美、スマホを耳にあてつつキッチンと、天井にある火災報知器を見上げる。廊下から向かって右の部屋の男には出て行ってもらった。左隣は誰も住んでない。知ってたかな?」
 泊瑛美 「(慌てながら) 千原さんに何したんですか!」
 泊瑛美 「そんなこと心配してていいのかな?」
 泊瑛美 「えっ?」
 泊瑛美 「ここは、ワンフロアあたりの居住者は四人しかいない。向かいの一人は、今日は帰ってこないらしいよ」
 泊瑛美 「:」
 泊瑛美 「ここはかなり防音に優れてるみたいだから、上の階にも下の階にもなかなか君の声は届かないだろうね」
 泊瑛美 「(強気な表情で) は?なに言ってるの? ベランダに出て叫べば誰か気付くでしょ」

探す、ソファの端にプリペイド携帯が置かれていて、着信が鳴っている。おそるおそる携帯を手に取り、着信に応じる。

泊 「(笑いながら) 簡単にベランダに出ら

れるのかな？」

泊 瑛美 「はいよ。行ってごらんよ。ベランダ」

瑛美、電話を持ったまま寝室に向かい、窓際のカーテンを開けると、泊が隣の千原の部屋のベランダから首を出し、瑛美の部屋のベランダを覗き込む。

瑛美 「いやあああああ！」

瑛美、絶叫しながらカーテンを閉め、

リビングに戻る。慌てて玄関に走って向かうが、何かに

気が付いて立ち止まる。

泊 瑛美 「(激しい動悸が収まらない)」

隣の男の部屋、反対の空室、君の部屋、全部僕が合鍵を持つてる。ああ、

それから、チェーンを切る工具もこな

いだ買ったばかりなんだ。五千円でお

釣りがくるんだね、知らなかったよ、

すごいよね」

泊 瑛美 「(震えた声で) な、なんなの……？」

「鬼ごっこだよ。先に部屋の外に出られ

たら君の勝ち。君を捕まえられたら、

僕の勝ち」

「(震えながら) ……私を、殺すの？」

泊 瑛美 「何言ってるの？」

「……？」

「きつと、殺してくださいってお願い

したくなるだろうね」

瑛美、恐怖で震えが止まらない。

電話を持ったまま、リビングの中央で

聴覚に集中する。玄関先で物音が聞こえ、慌てて玄関へ

走る。ドアが開き、泊がドアの隙間から大型

のチェーンカッターでチェーンロック

を今にも切ろうとしている。

瑛美 「いや！」

破壊され、瑛美の部屋のベランダに泊
 が佇み、瑛美を見下ろしながら不気味
 に微笑んでいる。笑い消える。
 すつと泊の表情から笑い消える。
 「オラァ！窓割っちゃうぞ！動け動け」
 瑛美、恐怖で声も出ない。反射的に
 玄関へよろめきながら駆け出す。
 背後で泊がすすと姿を消す。
 瑛美、落ちろぼろと泣きながら廊下に
 崩れ落ちる。プリペイドスマホに耳を
 あてる。
 「お願い：もう許して：こんな、もう
 耐えられない：僕に言われてもねえ」
 泊「そんな少しく何かを考え込む。」
 瑛美「（強い口調で）殺せばいいじゃない。
 さっさと！何これ？全然面白くない。
 さっさと犯すなり殺すなりやってみな
 さいよ！」
 「おお、言ったね？」
 瑛美、キッチンから包丁を取り出すと
 玄関脇の洗面所に急ぐ。映像を端末にて
 泊、監視カメラの洗面所に向かった瑛美が
 確認する。洗面所に、画面が真っ暗に
 なる。

○ 同
 ・廊下共用部（夜）
 泊、空室の部屋の前まで歩き、合鍵を使い
 瑛美の部屋を開ける。
 ドアを開ける。タタミを手に用意する
 チェーンロックを掛けたままにしている。
 が、何故かチェーンが外れてる。
 チェーンが外れてる。
 不思議に思っている。
 部屋の中にいる。
 部屋は真つ暗で、何も見えない。
 何も見えない。

○

同

座部クか底足瑛隠開瑛・
 つ屋ロら板音美し閉美ク
 てをー顔をそ殺包納に部の
 りくツ出つし、丁部な屋ゼ
 。とトすと、ゆ握がてクト
 、の瑛美けっりなわ、ゼの
 泊扉。ク口と梯子に潜む、
 背僅かな隙間椅子に

し端るダク探内泊もハ勢リで続る風部に側真と洗トポチブ泊・
 か末。イロすののいンいビ調いが呂笑屋かっ、面かケレ、瑛
 映をニーが衣顔ないガよンべて、の先部に所からッー寸美
 つ再ンゼ、類かい。にクのが寝美イがに錠に屋のナトンカ前
 て度グッやはよ笑。かロク、室がレら隠され、フ仕タの
 い開くが、ブルの向け、い。かっぜい。トッない。だ開くで、誰
 ないが、画面。椅子に腰かかけの

ハ勢リで続る風部に側真と洗トポチブ泊・
 いンいビ調いが呂笑屋かっ、面かケレ、瑛
 よンべて、の先部に所からッー寸美
 が寝美イがに錠に屋のナトンカ前
 室がレら隠され、フ仕タの
 見キびててダ気が点く。元
 付から。順番に調べ
 洗顔を。着の内にポケッ
 洗面所へ戻り、不気味
 窓が内

○

同

泊・瑛美の部屋（夜）
 映像を探り、歩く。

出。す。と。勢いよくクロゼットから飛び

泊 ○ 「同・瑛美の部屋（夜）」

泊、一瞬何が起こったか分からず、背中に両手でぺたぺたと触る。廊下を抜け、瑛美、その間に勢いよく廊下を抜け、玄關へ向けて全速力で走る。廊下を抜け、ドアを開錠し、ドアを開けるが、泊がチェーンロックを掛けたままに閉ざったことに気が付かず、ドアを開け直していたこと

瑛美 「いやああ！」

泊、背後から瑛美を襲うが、力が出ず瑛美に覆いかぶさり、揉み合いになる。瑛美が勢いよく泊を突き飛ばすと、泊は仰向けに背中から廊下に転び、背中絶命する。いた包丁が胸まで突き出、

○ 同・廊下共用部（夜）

瑛美、チェーンロックを外すと、勢いよく外に出る。廊下に住人男性が立っており、瑛美を見て驚いている。

住人 「（戸惑いながら）な、何かあったんで

瑛美 「：た：助けて：」

住人男性、瑛美の服についた血を見て慌てて瑛美の部屋を覗きこむと、泊が廊下で血を流し絶命している。泊が住人男性、状況を掴めず慌てる。瑛美、共用部の廊下で蹲り、嗚咽を漏らしている。

○ 瑛美の自宅マンションの前に、パトカーが数台と

マンションの周りを照らし、野次馬が数

りが煌々と周囲を照らし、野次馬が数

名集まっただけで、中から美濃田と

乗用車が一台到着し、中から美濃田と

草野が下りてくる。大騒ぎ

美濃田「急ごう」

美濃田と草野、マンション内に入って

いく。

○ 同・廊下共用部（夜）

瑛美、廊下で毛布を羽織り座り込む。

数名の制服の男性警官が脇に立ってい

る。美濃田と草野が到着、男性警官に話し

掛ける。

美濃田「状況は？」

警官「（短く敬礼し）ご苦労様です！どう

やら、ストーカーと思われる男性が

部屋に侵入、襲われたようでした」

美濃田「（瑛美を一瞬見下ろし）んで、返り

討ちにした、と？」

警官「：の、ようです」

美濃田「：の、ようです」

警官「はい！」

美濃田「はい！」

美濃田「すみませんね、部屋、入らせてもら

かける。」

美濃田「すみませんね、部屋、入らせてもら

美濃田「すみませんね、部屋、入らせてもら

美濃田「すみませんね、部屋、入らせてもら

美濃田「すみませんね、部屋、入らせてもら

美濃田「すみませんね、部屋、入らせてもら

美濃田「すみませんね、部屋、入らせてもら

美濃田「すみませんね、部屋、入らせてもら

美濃田「すみませんね、部屋、入らせてもら

美濃田「すみませんね、部屋、入らせてもら

美濃田「すみませんね、部屋、入らせてもら

美濃田「すみませんね、部屋、入らせてもら

美濃田「(部屋を見回し) 玄関から入ってきたよな」

草野「窓から入ってきた変態から逃げる為に玄関に向かっている途中で、追いつかれて、揉み合いになって：とか」

美濃田「(首を横に振りながら) なら、その変態の背中に包丁は刺さらんだろ」

草野「そうっすよね」

美濃田「とりあえず、現場を保存。詳しくは、あの子が落ち着いたら本人から聞こう」

草野「ですわね」

どこのからか携帯電話の着信音が鳴る。

美濃田「誰だ？ 君達か？」

制服警官や鑑識の人間は首を横に振る。

草野「僕でもないっす」

美濃田「(遮りながら) 静かに！」

美濃田と草野、音を辿り、リビング奥の寝室へ足を踏み入れる。リビング美濃田、ベッド周りを調べるが、ベッド本体から音がして、何かを手に取り、それをめくり、ベットのシーツを手でなぞり、枕も動かすが、音は鳴りやまないので、草野の方向を顎で促す。

美濃田「おい」

草野「これですか？」

草野「え、これですか？」

美濃田「同時にマットレスを持ち上げ、マットレスを落とす。ベッドの下の空

フムから床に落とす。

美濃田「同時にマットレスを持ち上げ、マットレスを落とす。ベッドの下の空

ベッから床に落とす。

洞に、血まみれの包丁と、切断された

美濃田と草野、アウトラインを避けながら廊下を抜け、リビングに入る。数名の制服警官と、鑑識の人間が部屋内で作業をしている。軽く会釈をする美濃田。

男性の手首が携帯電話を握った状態で
ビニール袋に入っており、その携帯電
話から着信音が鳴っている。

美濃田 「（驚きながら）なっ……」
草野 「（顔を引き攣らせ）な、何なんすか

これ！」
着信音が鳴りやむ。

※切断された右手の人差し指には、
金の指輪がはめられている。

リビングにいた制服警官や鑑識も寝室
に集まり、異様な光景に立ちすくむ。
瑛美、廊下にいた制服警官に支えられ
ながら寝室に現れる。
瑛美「あああああ……」
瑛美「そのまま失神し、倒れ込む。」

○ 警察署・取調室（朝）

美濃田 「瑛美が座つており、デスクを挟んで
美濃田と草野が向かい座っている。
瑛美「あ、憔悴したのか、お表情。おかた理解でき
ました。ただ、心に積るお察しします」

美濃田 「たね、さっき調べたら、一連の
ストーカー被害にあって、あなた
警察に一度も通報しておいて、あなた
何故、もつと早く警察に言わなかつ

美濃田 「瑛美、俯いたまま沈黙を貫く。
瑛美「あ、それはいい。問題はない。見つ

美濃田 「瑛美、顔を上げる。部屋にあなたもの
包丁は、あなたの手首です」

瑛美 「（首を横に激しく振りながら）私は
何も知りません！誰かが……」

美濃田「(遮り) いや、分かってます。

「これだけであなを猟奇殺人犯として逮捕なんて出来ません。ただ、込み入った事件です。もう少しいろいろと調べさせてもらいます。こちらがとりあえずの宿泊と警護は手配しますから、もう少し拘束させても構いません。」

瑛美「わかりました。」

美濃田と草野、取調室を出ていく。

○ 同 ・警察署・デスク(朝)

美濃田と草野、デスクでパソコンをタイピングしている。

草野「眠そうな表情。」

美濃田「手首、指紋でヒットした。」

草野「こつちも、美濃田さんの言う通り、

美濃田「よし：行くか。」

美濃田「画面を覗きこむ。」

美濃田「え、行くってどこですか？」

美濃田「決まってるんだろ？俺は静岡、お前は大阪。」

草野「(驚きながら) 今からですか!？」

美濃田「ただでさえ徹夜なんすよ!？」

「だからちよつとでも移動が長い大阪をお前に譲ってやってんだろが。」

草野「(うなだれながら) マジすかあ……」

美濃田、草野のデスクにA4サイズの紙媒体の資料が入ったクリアファイルの

美濃田「ほれ。準備は全部してやったから。道中にも熟読しろ。」

草野「寝かす気ないじゃないすか。」

草野「資料一式を美濃田から受け取り、美濃田も席を立つ。」

美濃田「美濃田も席を立ち、出口に向けて歩き出すと、草野のデスクの電話が鳴る。」

草野 「はい、電話に出る。はい、こちら？（目を見開き）」

草野 「電話を切り、出口へ向かっている。美濃田さん！止める。美濃田、足を止め振り返る。驚き、目を見開く。」

○ 閑静な住宅街（朝）

専門主婦風の中年女性が、ゴミ出しの為にゴミ袋を提げて住宅地のゴミ置き場に向かって歩いていく。ゴミ置き場の置き場のすぐ近くに、右腕が切断された千原が倒れている。右腕が切断された千原女性、地面を這う血だらけの千原を視界に捉え、悲鳴をあげる。

○ 救急病院・ER室前（朝）

美濃田と草野、廊下で救急隊員男性と話している。

美濃田 「容体は？」

隊員男 「（手元のタブレットを見ながら）意識はまだ！」

美濃田 「右手を切り落とされたことによる失血：ですか？」

隊員男 「いえ、そっちは綺麗なもんです。止血に感染対策まで完璧な処置がなされてますね」

草野 「じゃあ：？」

隊員男 「筋肉の弛緩剤、睡眠薬、その他複数の投薬の痕跡があります。体を動かかせないどころか、声もまともに出せない状態です」

美濃田 「（顔をしかめ）まだ話せそうにないですよね？」

隊員男 「命に別状はないですが、今暫くは」

美濃田、隊員男性に名刺を渡す。

○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○					
看 護 師		救 急 病 院 ・ 病 室 （ 夕 方 ）		大 阪 市 内 某 所 （ 昼 ）		静 岡 県 某 所 （ 昼 ）		警 察 の 手 配 し た 宿 泊 先 （ 昼 ）		美 濃 田	美 濃 田	美 濃 田	隊 員 男	美 濃 田		
「の 千 原 さ ん ！ ど う し た ん で す か ！ 」	「の 医 療 機 器 の 急 い で し た ん に 駆 け 付 け る 」	「外 機 器 の ア ラ ム が 鳴 り 響 き 、 性 」	「パ ニ ッ ク の 頭 を 抱 え 絶 叫 す る 」	「ふ と 目 を 覚 ま し て 、 周 圍 を 見 た と 、 」	「千 原 に 病 室 の ベ ッ ド で 複 数 の 医 療 機 器 」	「提 手 踏 草 野 、 」	「車 が 一 台 降 り 来 て 、 」	「三 階 建 物 と 二 階 、 」	「岡 某 所 （ 昼 ） 、 」	「瑛 美 、 」	「ド ア の 前 に 制 服 官 が 立 っ て い る 」	「裏 口 か ら ！ 」	「美 濃 田 、 」	「美 濃 田 、 」	「隊 員 男 、 」	「美 濃 田 、 」

千原 「（パニックになりながら）誰だ！

どこだよ！ここだよ！」

看護師 「看護師、慌てて千原の体を抑える。千原さん！落ち着いて！落ち着いて下さい！病院ですよ！」

千原、自身の右手が切断されていることに気付く。

千原 「うわああああああ！」
左手で頭を抱え、絶叫し暴れ回る。

○ 警察署・デスク（夜）

草野 「草野、くたびれた様子で椅子にもたれかかっている。美濃田が帰署すると、デスクにカバンを下ろす。」

草野 「あ、おかえりなさい」

美濃田 「帰ったか」

草野 「ついでさつきですけどね」

美濃田 「そうか。ご苦労」
草野、深刻な表情で、美濃田の方を見ずに呟く。

草野 「美濃田さん」

美濃田 「（書類を整理しながら）ん？」

草野 「さつさと取り調べしません？」

美濃田 「どうした？もうこんな時間だぞ」

美濃田、壁掛け時計を指差す。

草野 「何か：早く済ませたくなりました。」

このヤマ」

美濃田 「（少し考え）そうだな」

○ 同・取調室（夜）

警察署内の取調室。

瑛美が座っており、デスクを挟んで

美濃田と草野が向かいに座っている。

瑛美、更に憔悴しきった表情。

美濃田と草野、どこか冷ややかな

表情。

美濃田 「申し訳ないね、遅くに」

瑛美 「（小さく呟くように）何か分かったんですか？」

美濃田 「まあ、いろいろと」

美濃田 「美濃田、資料をデスクに並べ、瑛美に

向ける。まず、部屋から見つけた、切り落

とされていた男性の右手。あれは、

おたくの隣室の、千原さんのものだ

と確認が取れました。千原さんも、

今朝無事に保護されました」

美濃田 「（顔を上げ）無事なんですね！？」

瑛美 「ええ。重症ではありませんけど、命に

別状はないそうです」

美濃田 「どこにいたんですか？」

美濃田 「あなたの自宅からそう遠くないレン

タルボックスに監禁されていたそう

です」

美濃田 「（俯きながら）そんな：ひどい：」

美濃田 「（淡々と）次に、あなたを襲った

ストーカーの男。彼は、泊恒雄とい

う男です」

美濃田 「別々の資料をデスクに広げ、瑛

美濃田 「情報に、泊の写真や、犯罪歴、身元

の情報が記載されている。瑛美、写真を凝視する。復数の前科が

あったので、簡単に身元が割れまし

た。所持品はチェンカッターにナ

イフ、部屋に設置されたおびたいたく

の監視カメラの中継端末、あとは数

の現金。スマホは、使用するたびに

データを削除していたようで、現在

復元作業中です」

美濃田 「（要領が掴めない様子で）はあ：」

美濃田 「彼は九州に住んで、借金まみれで

窃盗の前科もあり、過去に性犯罪や

暴行事件でも何度か逮捕歴がある。と

とも、あなたと接点があったとは

思えませんか」

て、様子がおかしかったと言っている。ま、（回想終わり）

草野 「草野、瑛美に千原の写真を見せる。ちなみに、あなたの言う千原という男性は、この人物で間違いないですか？」

瑛美 「瑛美、写真を凝視する。印象が全然：違いますけど、似ています。多分、そうかと」

草野 「千原さんは、長髪で、ヒゲを生やしている。眼鏡をかけていました」

美濃田 「なるほど」

瑛美 「おざわざ変装をしていた訳だ」

美濃田 「美濃田、デスクに写真を並べる。写真には、千原の部屋の内観が写っている。」

美濃田 「千原さんの部屋は、勿論、彼名義で契約されてましたが、部屋には殆ど荷物がなく、とても誰かが住んでいたとは思えない様子でした」

瑛美 「え：」

美濃田 「非常に険しい表情で瑛美に向き直る。」

美濃田 「本題はここからです」

瑛美 「：はい？」

美濃田 「あなた、何か隠してるでしょう？」

瑛美 「（戸惑いながら）え、何ですか？」

美濃田 「（少し呆れた様子で）あの、我々は警察なんですよ？」

美濃田 「別の資料をデスクに放り投げる。」

美濃田 「千原の本名は、葛宮吾郎。千原は、妻の姓です」

瑛美 「（一瞬考え）え：」

瑛美、動揺している様子。

美濃田 一 瑛 依せ当美個晒す話だあ濃や美はそあ載料取濃 頼被時、再情れにど中、て勢谷はたれはだ、 が害、長び報も、犯格のい覚自手！顔を上げ。当のよ名ね前。 度々の相談中や家沈黙を貫く。いたこ報との嫌が除 々々相談中や家沈黙を貫く。いたこ報との嫌が除	美濃田 一 美 美濃田 一 瑛 美濃田 一 美	美濃田 一 瑛 美濃田 一 瑛	美濃田 一 記資を美 美濃田 一 記資を美	美濃田 一 記資を美	美濃田 一 記資を美	美濃田 一 記資を美	美濃田 一 記資を美	美濃田 一 記資を美	美濃田 一 記資を美	美濃田 一 記資を美	美濃田 一 記資を美	美濃田 一 記資を美
---	--	--------------------------	--------------------------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------

美濃田「記録に残っていた。当時、主犯格と美濃田、ゆつくりと瑛美を指差す。」

瑛美「男性は現在行方不明になっている」

美濃田「(苛ついた様子で) : それ、今関係あるんですか？」

美濃田「あの事件の関係者の中の誰かが、君と葛宮：一応今は便宜上千原と呼ぶけど、君と千原に復讐しようとしているのかもしれない。偶然にしてはありえない接点でしょう？」

瑛美「正直に話してくれないか？」

※ (フラッシュ) ※

古びた廃墟の手前の大きな木の枝にロ―プを結び、首を吊って絶命している。江畑美知瑠(15)。

瑛美、暫く悩んだ様子で、重々しく口を開く。

瑛美「江畑、美知瑠」

美濃田「(頷きながら) そう。あの子に何をしました？」

○ (回想／静岡県の中学校の教室…昼)

休み時間の教室の隅で数名の友人と談笑

美知瑠が教室の隅で数名の友人と談笑

瑛美「中央で談笑している。生徒達のグループの

「あの子、確か転校して来たばかりで

の、よかった。よけは、仲の良かったグループ

景子達に混じり、談笑する岩垣よう子
 (15)。

○(回想／廢墟・夕方)

畑道から少し脇に逸れた雑木林の奥、
 三階建ての廢墟。数名の少年少女の
 廢墟の中から、數名の少年少女の
 廢墟の建てるから、數名の少年少女の
 聞こえてゐる。

瑛美 N 「当時：私と、他に仲の良かった子達
 とありました。悪い先輩達と付いた子が
 人も、確か少。院に入つたことのあるあ
 る人も、確か少。院に入つたことのあるあ
 学校も、近くに廢墟があつたことのあるあ
 クスリや、たたり、めつたり、ない男の子
 人を拉致したり、めつたり、ない男の子
 をレイプしたり、めつたり、ない男の子
 をレイプしたり、めつたり、ない男の子

廢墟の二階部分の吹き抜けスペース、
 ソファの座五、六名の男女、
 テーブルには酒類や紙煙草、大麻や
 注射器が乱雑に置かれてゐる。大麻や

瑛美 N 「私は、その中の一人の男の子と付き
 合つていて、特別に何度かその場所
 に連れて行って、もらったこともあり

美濃田 N 「その彼は、中心的人物だった
 っ。彼の氏は、中心的人物だった
 っ。彼の氏は、中心的人物だった

瑛美 N 「詳しくは知りませんが、多分：そう
 だと思ひます」

○(回想／畑道・夕方)

美知瑠が自転車を漕ぎながら下校して
 いる。

瑛美 N 「後から知ったんで、あの廢墟に
 続く雑木林が、美知瑠の帰り道の
 途中だったそうです」

○（回想／廢墟・夕方）

美知瑠、不思議に思い後を尾ける。
 入った、畑道を横切り、雑木林の奥へと
 上る。掛けようとして、自転車のスピードを
 ら声を掛けようとして、自転車のスピードを
 美知瑠の岩垣に気がつく。微笑みなが
 美知瑠の数十メートル先に、岩垣が
 自転車を漕いでいる。後ろ姿が見える。

が一台、原付バイクが一台、中型のバイク
 に岩垣の自転車の乗り捨てである。脇
 美知瑠の少し前、おそるおそる廢墟の中
 自転車を進め、おそるおそる廢墟の中

廢墟の階段に入ると、二階から
 少年少女達の騒ぐ声が聞こえる。階段を

ゆつくり登ると、階段の踊り場から
 二階部分が見える。踊り場から

景子や岩垣が少年達に混ざり飲酒・

喫煙して、お原が注射器を腕に

打つている。千原が視界に入る。腕に

美知瑠の思わぬ口を手で押さえる。

ゆつくり後ろから携帯電話を取り出す。

ポケットの後から携帯電話を取り出す。

美知瑠の背後に少年A（18）が立つ。

美知瑠の少年A（18）が立つ。

向ける。二階の景色達も驚き、階段に目を

少年A、美知瑠の口を手で塞ぐ。

○（回想／廢墟・二階・夕方）

美知瑠の二階の吹き抜けの

地べたに座らされている。

周りを少年A・千原の二人、

少年A（16）・少女B（17）、景子と岩垣が

少年A「よつちやん、ここ来る時は周りに気をつけなっ

岩垣 「言ったじゃん」
 美知瑠 「ごめん、急いでたから」
 美知瑠 「懇願する。お願ひします！ごめんなさい！私、何も知らなくて、邪魔するつもりもなくて、岩垣さんの後を追いかけたら、たまたま……」
 少年 A 「（にやけながら）でもさ、お巡りにチクろうとはしたよね？」
 美知瑠 「（何度も首を振り）違います！」
 少年 A 「思いつきり携帯でどっかに電話しようとしてたじゃん」
 少年 A 「美知瑠の携帯電話のストラップを持ち、ぶらぶらと揺らす。誰にも言いません！約束します！……ですから、お願いです、帰して……」
 少女 A 「帰してあげれば？ビビりまくってんじゃない」
 少女 A 「煙草の煙を吹き出す少女 A。少年 A 「景子、こいつ同じクラスなんだ？」
 景子 「ソファに深く座り脚を組み携帯電話をいじりながら答える。うん。でもさ、確か転校してきたばっかだから、どんな子かあたしらも知らないんだ。ねえ？」
 岩垣 「だね」
 景子 「隣に立つ岩垣に顔を向ける。景子 「だから、信用できる子かどうか知らないや」
 少年 A 「千原が目を合わせ、にやついている。少年 A 「千原の二人が美知瑠に襲い掛かる。少年 A 「（淡々とした表情で）久しぶりだね」
 少女 B 「生で見るの」
 少女 A 「確かに」
 美知瑠 「美知瑠、慌てて後ずさりする。やめて下さい！いや！」

草田 ○ 警
 野、 瑛 署・取調室（夜）
 瑛草 ー美草 警察署・取調室（夜）
 美野、お前を無表情で見つめる。美濃
 びくつくそれを拳でも人間か！
 と怯える。しく叩く。

景子 ー少 少年A
 景子 ー景子、ソファから立ち上がる。美知瑠の肩
 を押さえて、地面に押し倒す。美知瑠の肩
 景子 ー「ちよつと待って！動きを止める。」
 少年A ー「千原が動いた？」
 景子 ー「やめて？」
 美知瑠 ー「は？なに？」
 美知瑠 ー「長谷中さん：ありがとう。ごめん、
 本谷に、秘密にするから。」
 景子、薄ら笑みを浮かべながら美知瑠
 に近付き、しゃがみ込む。戸惑う。
 美知瑠、景子の意図が掴めず戸惑う。
 ー（笑いなながら）「は？ごめん違うよ？」

景子 ー少 少年A
 景子 ー「この人達、とにかく乱暴だからさ」
 制服破れたり、殴って顔に痕でも
 残ったままにバレてしまっ
 綺麗なままにあげると、何
 なかったら、面であげるんだよ？
 取り囲む全員がニヤニヤと笑み
 を浮かべながら、携帯電話のカメラを
 起動させ、美知瑠に向かって構える。
 美知瑠、素早くスタンを取り出し、
 美知瑠の胸あたりで電流をあてる。
 美知瑠の視界、廃墟の天井がぐるぐる
 と回り、少年Aと千原が群がる光景が
 微かに見え、涙を流す。

ー（回想終わり）

美濃田 「を草 ※ て景騒岩天授景 (※
 がそ見野 ※ い子然垣天井業子フ ※
 ネのてが ※ る`と`後`頭`クッ ※
 ッ後いを ※ °動すろを岩垣がの教室 ° ※
 トかる。半 ※ 揺るろに上垣が青ざめ ° ※
 に？ ° 室中れ。の生徒達と教師 °
 ば君や `千原達の個人情報
 らや `千原達の個人情報
 撒 `千原達の個人情報
 か `千原達の個人情報
 れた `千原達の個人情報
 の `千原達の個人情報
 は `千原達の個人情報
 」 `千原達の個人情報
 美濃田 「を草 ※ て景騒岩天授景 (※
 がそ見野 ※ る`と`後`頭`クッ ※
 ネのてが ※ る`と`後`頭`クッ ※
 ッ後いを ※ °動すろを岩垣がの教室 ° ※
 トかる。半 ※ 揺るろに上垣が青ざめ ° ※
 に？ ° 室中れ。の生徒達と教師 °
 ば君や `千原達の個人情報
 らや `千原達の個人情報
 撒 `千原達の個人情報
 か `千原達の個人情報
 れた `千原達の個人情報
 の `千原達の個人情報
 は `千原達の個人情報
 」 `千原達の個人情報

美濃田 「を草 ※ て景騒岩天授景 (※
 がそ見野 ※ る`と`後`頭`クッ ※
 ネのてが ※ る`と`後`頭`クッ ※
 ッ後いを ※ °動すろを岩垣がの教室 ° ※
 トかる。半 ※ 揺るろに上垣が青ざめ ° ※
 に？ ° 室中れ。の生徒達と教師 °
 ば君や `千原達の個人情報
 らや `千原達の個人情報
 撒 `千原達の個人情報
 か `千原達の個人情報
 れた `千原達の個人情報
 の `千原達の個人情報
 は `千原達の個人情報
 」 `千原達の個人情報

美濃田 「を草 ※ て景騒岩天授景 (※
 がそ見野 ※ る`と`後`頭`クッ ※
 ネのてが ※ る`と`後`頭`クッ ※
 ッ後いを ※ °動すろを岩垣がの教室 ° ※
 トかる。半 ※ 揺るろに上垣が青ざめ ° ※
 に？ ° 室中れ。の生徒達と教師 °
 ば君や `千原達の個人情報
 らや `千原達の個人情報
 撒 `千原達の個人情報
 か `千原達の個人情報
 れた `千原達の個人情報
 の `千原達の個人情報
 は `千原達の個人情報
 」 `千原達の個人情報

美濃田 「を草 ※ て景騒岩天授景 (※
 がそ見野 ※ る`と`後`頭`クッ ※
 ネのてが ※ る`と`後`頭`クッ ※
 ッ後いを ※ °動すろを岩垣がの教室 ° ※
 トかる。半 ※ 揺るろに上垣が青ざめ ° ※
 に？ ° 室中れ。の生徒達と教師 °
 ば君や `千原達の個人情報
 らや `千原達の個人情報
 撒 `千原達の個人情報
 か `千原達の個人情報
 れた `千原達の個人情報
 の `千原達の個人情報
 は `千原達の個人情報
 」 `千原達の個人情報

瑛美田 「はい：」
 美濃田 「親はどうした？」
 瑛美 「私が無実だつて訴えたら、親は私を信じて、守ってくれました。」

草野 「草野、瑛美に向き直ると、瑛美の顔を覗き込む。」

瑛美 「家では良い子演じてたわけだ？」
 「（俯きながら）はい、すみません」

美濃田 「とはいえ、ネットの拡散力には到底勝てなかった？」
 瑛美 「はい。何度か転校を繰り返しましたけど、すぐに情報がバレて、匿名で嫌がらせされたり、止まることはなかったです」

美濃田 「それで、名前も変えて、母親の旧姓の小野松姓を名乗るようにした？」
 瑛美 「（頷きながら）はい：両親には反対されましたけど、私も両親も精神的

草野の体が一瞬こわばるのを、美濃田が瑛美に見えないよう、デスクの下で制止する。

美濃田 「千原とは？それから連絡は取ってなかつたんだな？」

瑛美 「（頷きながら）…はい」
 美濃田と草野、目を合わせる。
 美濃田、溜息をつきながら椅子の背もたれにゆっくりと体を預ける。

○ 同 ・取調室外の廊下（夜）

草野、取調室外の廊下の壁にもたれかかり立っている。苛ついた表情。
 美濃田、廊下奥の自販機から両手に紙コップに入ったコーヒ―を草野に渡す。

草野 「（会釈しながら）信じられませんが」
 美濃田 「（深刻な表情）早く終わらせよう」
 再び取調室に入室していく二人。

○ 同・取調室（夜）

美濃田「美濃田と草野が席に着く。紙コップを瑛美の前」

美濃田「瑛美、ここに小さく会釈する。これで最後だ」

瑛美「はい」

美濃田「美濃田、誰がやったと思う？」

瑛美「美濃田、顔を上げたか？」

美濃田「美濃田、今君と千原に恨みをもってる」

美濃田「（目を横に振りつつ）それはない」

○（回想／静岡県の江畑医院…昼）

白衣の奥の応接室。美濃田（55）と向かい合

い、ソファに座る美濃田（54）がお盆を

持つて応接室に入った。腕をそれぞれの前

に置き、茶の入れ替わりの間に、美濃田（54）が

美濃田「彼は、大学病院の院長で、美濃田の相当優秀な

外科医で、美濃田の診察、開業は

平土曜日の午前、診察、開業は

診療も、患者の自宅訪問

日曜日も、患者の自宅訪問

なす、医師だ」

蘇美濃田から流す事件について聞き、記憶が

哲朗、桐子の肩を抱き寄せる。

美濃田 N 「妻の桐子は、公認会計士として働いていて、この病院経営の手伝いもしている。夫は、仕事も無い時は、地城のボウティアに参加したりは、精神的にも相応不安で、精神科の通院歴もあって、そのうだが、今では立直つて、いる。」

美濃田 「二人とも、ほぼ仕事しかしてない。アバリバイには、時間埋めてるよな。紛らわす為、二人を埋めるよな。印象はあるが、二人には不可。」

（立ち、応接室を出ていく。哲朗と桐子も席を）

美濃田 「二人とも、ほぼ仕事しかしてない。」

美濃田 「美濃田、手元の資料に視線を落とす。」

「三歳。姉の記憶から、無いだろ、二歳から無関係だ。う。憶すから、親戚はいるが、あまり接点はない。転校した友関係は、美知瑠さんの転校以前、の友関係は、これからだが、君の方では他に誰か、思い浮かばないか？」

瑛美 「（暫く考え込み）でも……あの子は、

確かに、すぐ友達にできてました。が、復讐を考へるほど深い仲の子が、いたかどうか：」

美濃田 「美濃田、瑛美の話を手で遮る。」

草野、美濃田の方に顔を向ける。

美濃田「十六年も経った今、何故犯人は行動
 を起こしたのか？」
 草野「かなり時間も金もかかる犯行ですし
 計画を練っていたとか？」
 美濃田「(首を横に振り)いや、こういった
 犯罪の計画に年数をかけすぎるのは
 得策とはいえない。対象の居住地、
 職種、家庭環境、更に言えば世の中
 の防犯レベルや捜査技術も変わって
 いくからな」
 草野「」
 美濃田「じゃあ：？」
 美濃田「泊を操る為だけでも相当
 な金がかかっているから、単純に資金
 が貯まるまでに時間がかかっただけ
 なのかもかもしれません：」
 美濃田「顔を見ない様子。」
 草野「草野、美濃田の顔を覗き込む。」
 美濃田「を送る。瑛美に少し気まずそうな視線
 を送る。」
 美濃田「恨みも、一人の人間を十六年間も
 恨みが沈黙し、不安な空気は流れる。
 全員が沈黙し、不安な空気は流れる。」
 美濃田「見知らぬ人間には気が付いた書類を
 美濃田「始めに。」
 美濃田「」

○ 美・取調室外の廊下(夜)
 草野「大丈夫ですか？あの女帰しちゃって」
 美濃田「千原の殺人未遂は長谷中への
 ないことは明らかだし、長谷中への
 ストーカー行為と不法侵入、それと
 殺人未遂は泊がないだろ」
 草野「どうしようもないだろ」
 美濃田「お前はもうどう思う？」
 草野「(少し考え込み)そうっすね：一步
 間違えば殺人か未遂でブタ箱に入れ

美濃田 「違う」
「深い可能性もあった訳で、それだ

美濃田 「あんな雑な工作じゃ、右手を切断し

草野 「出来る訳ない」

美濃田 「草野、足を止める。想像してみろ。確実に自分の命や

生活脅かす誰かが、すぐ近くに
いる。でも、その相手の年齢・性
別・容姿・どこにしているのか、その

美濃田 「草野、表情をこわらせるか？」

先「美濃田さんは？」朝イチで

美濃田 「(背を向け歩きながら) 千原に会う」

○ 美濃田の自宅マンション(夜)

2LDKのマンション。美濃田が帰宅
し、出迎える妻・愛海(36)。

美濃田 「お疲れさま」

愛海 「お疲れさま」
「愛海、料理をテーブルに並べ、美濃田

美濃田 「(美濃田の顔を覗き込みながら) だいぶお疲れみたいじゃない？」

美濃田 「(微かに微笑みながら) そんなに

暇そうだったか？今まで」

愛海 「(笑いながら) そうじゃないよ。

でも、家に帰っからそんな雰囲気なの、珍しいなあって」

美濃田 「ちよつと特殊な事件なんだよ。今

愛海 「家で仕事の話しないう主義って言っ

たってさ、普段、人を疑ったり話

聞いてばかりなんでしょ？たまには、話す側に回ってみたら？」

美濃田 「(苦笑いし) いや…とても家でする

ような内容じゃない」

愛海、テーブルに肘をつき体を乗り出す。

愛海 「私が聞きたいの。話して」

美濃田、暫く考え込み、リビング奥の

美濃田 「麻美は？もう寝たから、

「もうん、お薬、ちゃんと飲んだから、

愛海、瞬間、寝室に鋭い視線を向ける

美濃田 「じゃあ話すよ。聞くのが耐えられな

「分かったら言っ」

愛海、姿勢を正す。

電気が消えた寝室のベッド。

美濃田、美濃田のベッドが、閉じていた

○ 瑛美の部屋・リビング(朝)

瑛美、ドアを開け、帰宅する。

電気を点け、リビングに足を踏み入れ

る。部屋は泊に襲われた日のままの

状態。部屋は泊に襲われた日のままの

ふと背筋に寒気が走り、誰かに見られ

ているように視線に襲われ、部屋中を

見回す。部屋の飛び出していく。

○ 同・エレベーター前(朝)

瑛美「きやっ！」
住人男「（瑛美を見上げながら）あ、すみません。驚かせて」
瑛美「奥に体を詰めながら、先に降りよう。住人男性に促す。」

○ 同 エントランス（朝）

瑛美「乗るエレベーターが、到着、か、う、最、中、エントランスへ向かい、いた管理男性から声をかけられる。」

管理 人 「小野松さん？」

瑛美 「はい。」

瑛美 「いろいろと大変でしたね…」

管理 人 「ただね：（言いにくそうに）あなたがいけない間に：」

管理 人 「管理男性、カウターの下のからA4サイズ、紙の束を取り出す。」

紙には、瑛美の過去について暴露した内容や、誹謗中傷がびっしりと書かれて

いる。瑛美「申し訳ないと思っただけ、僕もさ、ネットの束を見下ろす。」

瑛美「ここに紙の束が見下ろす。」

管理 人 「管理男性、ポストを指差す。」

○ 瑛美の自宅近辺の街並み（朝）

瑛美「ま、あ、他の人、これ以上、いや、怖い。ま、あ、あなたに言っても、仕方あり。」

管理人「管理人、いや、怖い。ま、あ、あなたに言っても、仕方あり。」

※ 入って作業姿の男性がマンションに ※
 ※ フラッシュ ※
 ※ マンションから出ていく瑛美と入れ違 ※

瑛美「何者か、直接ここにきて作業して。」

管理人「（呆れ笑いながら）ネットワークカメラじゃあるまいし、ハッキング。」

瑛美「よく分かりませんが、ハッキング。」

瑛美「一部の間帯だけ、録画されたものが、繰り返して流れてた形跡があった。」

管理人「替えたみたいなんですか？」

瑛美「防犯カメラは？誰かやっただけ？」

瑛美「さ、それ。ドーム型の防犯カメラを見付。」

管理人「それだけじゃない。エレベーター、各階下の掲示板、至るところに、瑛美の頭上を見回し、天井角に設置。」

千原「(口調を荒げ) いちいち覚えてない！ 防犯カメラの改竄とか、ポストの中身を盗んだり、封筒入れたり、

美濃田「具体的に？」

千原「苦い表情。」

美濃田「あの女。あの女に対しての嫌がらせやストーリーカ

千原「あ、女の指示は？」

美濃田「細かい指示があったよ。二回目から」

千原「それからは？ 電話の相手から」

美濃田「ああ：」

美濃田「珍しい苗字ですかね」

千原「かなり疑われたけど、何とか押し通

美濃田「どこまで知ってるんです？」

千原「あいつは、あの件以外は知ってる。

美濃田「失礼しました。あなたの奥様は、

美濃田「て困るのよ？ 家族や会社にバラされ

千原「(少し強い口調) 刑事さん、分かつ

千原「相手の話を聞きましたか？ 状態から、美濃田

美濃田「失礼。あなたには複数の前科があり

千原「機械で変えているような、変な声」

美濃田「相手の声は？」

千原「：知らない番号からの電話、俺の

美濃田「何で最初にご自身に起きた異変は

美濃田「千原、虚ろな目で美濃田を見る。

美濃田「美濃田、その脇の丸椅子に座る。

千原「病室のベッドで、上体だけ起こ

聞こえた

※ (※) ※
 千原、瑛美の隣の部屋で待機している。
 ると、ドアの覗き穴を覗き込むが、
 玄關のドアの覗き穴を覗き込むが、
 誰もいない。覗き穴を覗き込むが、
 不思議に思い。覗き穴を開けると、何者か
 がドアの陰にいたり、
 おドリスの陰にいたり、
 ゆつくりと意識を失う。
 ※ ※ ※

美濃田 千原「その次に覚えていることは？」
 千原「徐々に覚えていく。あの、
 千原「徐々に覚えていることは？」
 千原「徐々に覚えていることは？」

○ (回想)
 千原「住宅街の暗なレンタルボックスの昼中
 入口に背を向けた状態で椅子に縛られた
 た状態に目を隠した。口元に縛られた
 テーブルが貼られていた。右腕は
 荒く呼吸する。線と、右腕は
 ふと右手に視線を落とすと、
 切断された包帯で固定されている。
 パニックに包帯で固定されている。
 すすが、拘束は解けない。吸って全身を揺ら

千原 N 「目が覚めた。右腕に激痛を感じて
 何もかも覚めた。右腕に激痛を感じて
 何故か、まがいた。全身がだる
 高熱が出た。入らな。全身がだる
 く、力が入らない。全身がだる

レックボックスの扉が開き、真暗
 なボンクルボックスの扉が開き、真暗
 なボンクルボックスの扉が開き、真暗
 差し込む。瞬間だけ陽光が強く暗
 千原「誰かが入って来る足音を背後で

千原 「(震えた声で) もう関係ねえだろ…

美濃田 「何年前の話だっつんだよ…」

美濃田 「何か思い出したことや気付いたこと

がある。美濃田、ゆっくりと丸椅子から立ち上

が。美濃田、ベッド脇に名刺を置く。

病室の出口まで歩くと、ドアの前で

足を止める。美濃田 「それからな」

美濃田 「それからな」

千原、目を覆っていた左手を離し、

ドア脇の美濃田に顔を向ける。

美濃田 「お前、冷ややかな視線。」

千原、激怒した様子で美濃田の名刺を

掴み、放り投げた。病室を出ていく。

美濃田、無言で荒々しく肩で息をする。

千原、興奮し荒々しく肩で息をする。

○ 警察署・デスク(朝)

美濃田 と草野がデスクで向かい合い、

すり合わせをしている。

草野 「朝からお疲れさまでした」

美濃田 「おう、そっちはどうだ？」

草野 「(微かに笑み) 収穫アリ」

美濃田、自身のデスクのパソコン画面を

美濃田、画面を凝視する。

草野 「江畑美知瑠の同級生や転校前の線は

全然で見たけど、泊は、住む場所も

職場も転々としてたものちよつと

ずつ迫れまして。派遣会社から、

数年前に提出された履歴書のデー

美濃田、草野のパソコン画面を凝視し

何かに気付く。

美濃田 「派遣社員として静岡の工場

で働いて

たのか！」

草野 「(頷き) ええ、しかもその工場、

例の廃墟からそう離れてませんよ」

望海 N 「悔らしいけど、今はまだ精神的に会わ

手紙は横書き、読み始める。書かれた物。

※差出人は望海、住所は大阪の自宅。

千原、手紙を讀み始める。書かれた物。

篤 瑠 「また後で、下の交換に来ますから、

すつと封筒に重ね、開け、手紙を取り出

篤 瑠 「あ、あの封、開けましたよ。か？」

慌てる。千原の右腕に一瞬視線を向け、

落とす。虚ろな目のまま、封筒に視線を

入った。封筒を置く。届いてましたよ。」

篤 瑠 「千原さん、お紙が届いてましたよ。」

病室に入して、変装が千原の

○ 救急病院・病室（昼）で切り落とされた

と、真剣な表情になり、小さく頷く

美濃 田 「終わらせようや。」

草野、半笑い呆れた表情。ですか？」

草野濃田 「行くとき、いまだ？」

草野、尋ねる。美濃田、席から立ち上がる。

草野濃田 「も、かして、いまだ？」

美濃田、座席から見上げ、おそろる。

書いても立ってはいられず、手紙を
 書き直して落ち着いたらちゃんと会いに
 行くからね。紙なんて書かないから、
 めったに文章で取れない状態じゃない
 拙い文に食事も取れない状態じゃない
 ろくに食事も取れない状態じゃない
 か、とに食事も取れない状態じゃない
 さっさと今一配いたような気が
 するのに、今は遠くにいるみた
 もうあなた寂しさと遠くに
 いで、凄く寂しい。遠くに
 なんで、こんな寂しい。遠くに
 も、すごく寂しい。遠くに
 く、やしいよ。でも今は、あなたが
 早く帰って来てくれるかと
 ばかり考えてる。時間はかかる
 ば、かき捨てて、落ち着いたら
 思、うけど、落ち着いたら
 全部話して、一緒に進もうね。
 部屋は綺麗にしてあるよ。いつ
 帰って来れるから。私がいつ
 壊れたらダメだよ。私がいつ
 一緒に帰ろうよ。私がいつ
 一緒に帰ろうよ。私がいつ
 一緒に帰ろうよ。私がいつ
 よ。一緒に帰ろうよ。私がいつ

千原、手紙を読み終え、嗚咽を漏らし

○

静

岡の中学校・外観（昼）
 古びた田舎の中学校の外観。
 グラウンドでサッカーをする男子生徒
 や、水飲み場近くで談笑する女子生徒
 が、数名いる。

○

同

・中学校・校長室（昼）
 校長室のソファに座る美濃田と草野。
 芝原、何枚かの書類をテーブルに広げ

芝原 「なるほど：この男が、江畑さんの
お父様が遭遇した男：ということ
ですか」

美濃田 「(頷き) 間違いないでしょう。何か
思い出されたことがあれば、ご一報
ください」

芝原 「わかりました」

美濃田と草野、ソファから立ち上がる

○ 同・校庭(昼)

美濃田と草野、校舎を後にし、正門へ
向け歩く。

草野 「状況を整理しました」

美濃田 「小野松への一連のストーカー行為は
誰かが泊りに指示して行ったもの」

草野 「ええ」

美濃田 「ただ、その泊も、千原も、元を辿れ
ばこの町で起きた人間：」

草野 「千原と違って、泊が金で動かされて
いたのは何故でしょう？」

美濃田 「(少し考え) あいつは、脅しても
失うものがないから」

草野 「ただ、背景は千原と同じで、小野松
への復讐の過程で利用されて、最終
的には彼らも復讐の対象だった」

美濃田 「そうなるなら、捜査協力もなかった泊
が事者当初の計画では小野松が警
察に保護されてから、殺されるか、
泊も、当分の計画で殺されるか、
同様に襲われていた。可能性は高
い」

草野 「待って。何か付く。小野松や千原は、
野様、襲われていた。小野松や千原は、
草野様、襲われていた。小野松や千原は、

美濃田 「あま当待野同に泊当がそ的へのた失
濃さあまし時つ野同に泊当がそ的へのた失
田っあしたネッ下か襲さ当の報もな。復程で利用されて、小野松
、きの父親の泊に個人情報が拡散され、
正門を長に江畑哲郎は泊の人物は、
抜けしか駐車してない」

○ 草野

美濃田「に草車の
濃田「顔を野の
、わを向深鍵
、らせける溜
振りまし息を
り返しようをつ
校舎を見上きな
げながら、美濃
、頷く。田

○

○ 瑛美の自宅付近の歩道（昼）

向美の自宅付近の歩道（昼）
袋の中は、憔悴した表情。
の備品が入っている。荷造り用

○

○ 瑛美の部屋・リビング（昼）

瑛美の部屋・リビング（昼）
無造作に放る。コンビニの袋をソファに
入った段ボールが十数枚重ねて立てか
けられた。箱組み立てると、リビ
ングの端の本棚の書物を段ボールに入れ
て、本棚の端から、中学校の卒業アルバム
を発見する。を

※タイトルの文字の真下に『Let's knock
on the door to TOMORROW』と書か
れている。

○ 瑛美

「おそるおそる中を開いてみると、瑛美
の個人写真に黒い目線がマジックで
書かれており、個人写真全体が赤い丸
で囲われてる。ア
「ひっ！」
「アルバムをゴミ箱に突っ込む瑛美。」

○

○ 運転中の車内（昼）

移動中の車内（昼）
草野が運転、美濃田は助手席。
美濃田「一連の事件の捜査資料に目を

○ 同 六帖ほどの美知瑠と篤瑠の部屋（昼）

○ 江畑医院・二階（昼）

美濃田 「お願ひします。見せていただきたい
 桐子 「（少し躊躇い）わかりました……」
 美濃田 「もうです。しょうか？」
 桐子 「はい？」
 美濃田 「部屋は、お亡くなりになった頃の
 美濃田 「美知瑠さんの部屋を、見せて下さい。
 美濃田 「再度詳細に：数日のアリの確認
 草野 「あ、これ以上何を？」
 桐子 「先日、全てお話ししたはずですが、
 挟んで向かいの席に座る桐子。卓を
 で、美濃田と草野が椅子に座り、卓を
 医院の二階、自宅を兼ねたりリビング
 美濃田 「（戸惑い）え、何なんですか？」
 草野 「とにかく、行こう。」
 美濃田 「訝しげな様子。」
 美濃田 「先導し江畑医院に入っていく
 草野 「どわかった気がする。」
 美濃田 「どういうことですか？」
 暫くその場で数秒考え込む。
 美濃田 「行こう。」
 草野 「（戸惑い）え、何なんですか？」
 美濃田 「とにかく、行こう。」
 草野 「訝しげな様子。」
 美濃田 「先導し江畑医院に入っていく
 草野 「美濃田の様子を気遣う。施錠する
 美濃田 「わかった気がする。」
 草野 「どわかった気がする。」
 美濃田 「どういうことですか？」
 暫くその場で数秒考え込む。
 美濃田 「行こう。」
 草野 「（戸惑い）え、何なんですか？」
 美濃田 「とにかく、行こう。」
 草野 「訝しげな様子。」
 美濃田 「先導し江畑医院に入っていく

草 野	桐 子	美 濃 田	桐 子	美 濃 田	美 濃 田	美 濃 田	美 濃 田
さ記二合待野が出あ。く子今濃あ動身ハ三で美し野子な十子濃つ療関に右並参お本巡設の片勉	ん憶るいつての。こはこか中を働い卒業してから家で	がす三歳が下さい濃田向き直るせ。ん「です	「開桐「美「 く。、、。、。、 子、彼女はこ方に向す直るか「 。、、。、。、。、 今、、、。、。、。、 濃、田、子、を、疑、つ、で、す、ま、き、直、る、か、 「	「訝草桐 「美し野子な十子濃つ療関に右並参お本巡設の片勉	「美し野子な十子濃つ療関に右並参お本巡設の片勉	「美し野子な十子濃つ療関に右並参お本巡設の片勉	「美し野子な十子濃つ療関に右並参お本巡設の片勉
キ憶るいつての。こはこか中を働い卒業してから家で	がす三歳が下さい濃田向き直るせ。ん「です	「開桐「美「 く。、、。、。、 子、彼女はこ方に向す直るか「 。、、。、。、。、 今、、、。、。、。、 濃、田、子、を、疑、つ、で、す、ま、き、直、る、か、 「	「訝草桐 「美し野子な十子濃つ療関に右並参お本巡設の片勉	「美し野子な十子濃つ療関に右並参お本巡設の片勉	「美し野子な十子濃つ療関に右並参お本巡設の片勉	「美し野子な十子濃つ療関に右並参お本巡設の片勉	「美し野子な十子濃つ療関に右並参お本巡設の片勉

哲朗
 一 そ哲朗、うてを忘れるように歩み寄ると、肩に
 状態が、手を知るか、何も知らずに
 一 美濃田、草々とお辞儀する。今、刑事さん、美知瑠
 一 私が悪いです。今、刑事さん、美知瑠
 一 仰つた通りです。今、刑事さん、美知瑠
 一 追おうと動き回って、仕事を打ち込む
 一 全員の哲朗の方を向く。一
 一 やめなさい。一
 一 哲朗が白衣姿でドアの前に現れる。一
 一 い！あなたに何がわかるの！一
 一 （食い気味に声を荒げ）やめて下さ
 美濃田
 一 桐子、美濃田に背を向ける。一
 一 桐子の、私には気が付かない方も同じ環境
 一 娘の精神は限界を迎える寸前だった。一
 一 家も安らげられる場所ではなかった。一
 一 馴染めようになつて、管理・監視に支配
 一 子供を思う親が、いつの間にか子供
 美濃田
 一 桐子、動揺した表情。一
 一 子供、動く揺らぎが、いつの間にか子供
 美濃田
 一 困った表情。美濃田の真意が掴めず、
 一 惑したと野に、美濃田の真意が掴めず、
 美濃田
 一 私にも一人、娘がいます。不登校に
 一 美濃田、短く息を吐く。一
 一 て事件の後は、この家で何かあったなん

○（回想／江戸前（昼））
 十、年の美知瑠の自殺、憔悴。
 桐子「表情。」
 篤「3）が桐子の元に歩いてくる。」
 篤子「お外で遊びたい。」
 ねえ「ママ、空で宇宙を見たい。」
 桐子「ママ！お外に行きたい！」
 向ける。「返ると篤瑠に鋭い視線を」
 桐子「ダメ！ダメよ！外は危ないから」
 篤「おうちで遊ぶかい？ママがあなたを」
 篤「おついであ、強張らせろ。」
 篤「驚き体を強張らせろ。」
 篤「でも、椅子から立ち上がり、篤瑠の肩を強く」
 桐子「（怒鳴るように）あなたのために！」
 篤「外には怖い人達がたくさいるの！」
 篤「どうして分からなくていく。」
 篤「涙目になっ、ていく。」
 篤「ごめん、さかいら手離す。」
 桐子「篤瑠から手離す。」
 瞳孔が開き、正気ではない表情。
 （回想終わり）

桐子「あの子が小学校に上がったも、私は」
 美濃田「管理の小さく、り監視ですよ」
 桐子「子外で遊ばせ、学校にいますよ」
 桐子「ど外で遊ぶさ、ず、学校にいますよ」
 桐子「誰よ、短く、せ、学校にいますよ」
 桐子「帰らせ、も、り、遅くなると」
 桐子「怒鳴りつけ、る、友達のま、だ、学校と」
 桐子「で、仲の、良、お、友、名、前、家、両、親」
 桐子「の、職、ま、格、友、達、の、前、家、両、親」
 桐子「して、業、し、格、友、達、の、前、家、両、親」
 桐子「濃、田、と、草、野、の、格、友、達、の、前、家、両、親」
 桐子「美、濃、田、と、草、野、の、格、友、達、の、前、家、両、親」

哲美
朗濃
田

「美濃田、何をやりまして、せん。ただ、よう、中学に入って

あ、それ、まだ、それを、保書、し失、あ、朗、と、篤、私、し、元、時、を、そ、可、自、目、妻、そ、子、つ、美、濃、田、と、草、野、

哲美
朗濃
田

「哲朗、と、篤、私、し、元、時、を、そ、可、自、目、妻、そ、子、つ、美、濃、田、と、草、野、

哲草
朗野

「草野、と、篤、私、し、元、時、を、そ、可、自、目、妻、そ、子、つ、美、濃、田、と、草、野、

哲朗

「朗、と、篤、私、し、元、時、を、そ、可、自、目、妻、そ、子、つ、美、濃、田、と、草、野、

篤哲
瑠朗

「篤瑠、と、ね、篤、何、る、

○（回想／畑道（夜））
 懸命に直す。茫然とした表情で、乱れた制服を
 美濃田「今でも思い出す。美知瑠が
 哲朗「（驚き）え？」
 美濃田「被害に遭った夜の事」
 哲朗「何を感ずる権利なんでも、私にはあの子
 哲朗「何か止めなすんじやないかと、不安
 美濃田「廃墟で見かけた男について」
 哲朗「仰る通りです」
 美濃田「篤瑠さん、話さねえ？」
 哲朗「たか？」
 美濃田「ひとつお聞きします。ここを出てい
 時、篤瑠「この事を詳細に尋ねられませんでしたし
 美濃田「と共に出ると言われませんでした」
 哲朗「ゲームアプリやビジネス用のクラウドの
 美濃田「中学を卒業する頃には、いくつかの
 美濃田「家庭の材料のように感じました」
 哲朗「演じているんです。それまでの事が
 美濃田「え？」
 美濃田「美濃田と草野、目を合わせる。でした」
 哲朗「家での会話？」
 美濃田「家での会話？」
 美濃田「から家は空けることも多くなりま

眺めている。

○ 運転中の車内（夜）

草野 「草野が運転をし、美濃田は助手席。

美濃田 「どうします？」

美濃田 「（上の空な様子で）何が？」

草野 「この後です」

美濃田 「今日はもうこのまま帰ろう。明日か

草野 「や、それはそうなんですが、あの女

美濃田 「江畑篤瑠の事、教えますか？」

美濃田 「ダッシュボードに散らばった

ダッシュボードには、美知瑠の生前の

写真や自殺現場の廃墟前の写真が散ら

ばっている。

美濃田 「冷ややかな表情。

美濃田 「（淡々と）証拠はないしな。何か

草野も、どこか冷ややかな表情。

草野 「（軽いトーンで）ですよね」

草野 「草野、暫く運転を続けるが、何か

草野 「付いた様子で美濃田に目を配る。

美濃田 「それにしても：」

美濃田 「窓を見ていた視線を戻す。

草野 「あの女の周辺に、ハタチ前後の怪し

い女なんていないすよね？」

○ 瑛美の自宅付近のコンビニ（夜）

瑛美 「表情から完全に生気が消えている。

瑛美 「そこに若い男性店員が現れる。

瑛美 「そこに若い男性店員が現れる。

瑛美 「そこに若い男性店員が現れる。

瑛美 「そこに若い男性店員が現れる。

瑛美 「そこに若い男性店員が現れる。

瑛美 「そこに若い男性店員が現れる。

瑛美 「そこに若い男性店員が現れる。

瑛美 「そこに若い男性店員が現れる。

瑛美 「そこに若い男性店員が現れる。

瑛美 「そこに若い男性店員が現れる。

篤瑠 「をほどき始める。」
 店員男 「男性店員、ふと何か気付く。」
 篤瑠 「あ、もしかして今日？ラスト」

※しかし目線だけは合わせない。

篤瑠 「そんなんです。お世話になりました」
 店員男 「そっかあ。長い間お疲れ様！いつも
 本当頑張ってくれて助かったよ」

篤瑠 「（笑顔で）とんでもないですよ」

店員男 「それにしても急だね」

篤瑠 「ちよっとやる事が出来て、引越すんです」
 店員男 「あ、もしかして大学？いや、ケイちゃんは専門
 学校か」

篤瑠 「そんなとこです」

店員男 「男性店員、やや気まずそうな表情。」

篤瑠 「あ、あのさ。ずっと気になってたん
 だけども」

店員男 「なんですか？」
 篤瑠 「そのリストバンドって、何か意味あ
 るの？」

店員男 「篤瑠の左腕に嵌められた
 リストバンドを指差す。」

篤瑠 「一瞬腕に視線を落とすと、笑み
 が消える。」

すぐに笑顔を戻し、リストバンドを外
 すと、篤瑠の左腕の内側に、ミヤコグ
 サをモチーフにした大きなタトゥーが
 彫られている。

篤瑠、明るく微笑む。

店員男 「正解は、タトゥー隠しでしたー！」
 篤瑠 「（目を見開き）ええ！そうだったの

！？全然気付かなかった！」

篤瑠 「黙っててすみません、バレたらクビ
 になっちゃうと思っただけ……」

店員男 「（苦笑い）ま、まあそうだね……でも

よく似合ってるよ」
 篤瑠、にこっと微笑む。

瑛美「ページに開かれた状態で立てかけられ
瑛美「いや、絶対あんなに部屋を出ていく。」

○ 街の雑踏（朝）

○ L風の女性が道を歩いている。
向かいから、ボサボサの髪で俯き独り
言を、吹きながら歩く瑛美を視界に捉え
ると、L風の女性は距離を空けて
避ける。他の通行人も瑛美を避ける。

※冒頭のシークエンス

瑛美「何かをぼそぼそと呟きながら、
ふらふらと歩いていく。」

○ 瑛美の新しいマンション・ベランダ（夜）

瑛美の新しいマンション・ベランダ（夜）
焦点の合わない目で遠くを見つめる。
背後の部屋の中は、引越したばかりの
段ボールが山積み、散らかっている。
ベランダの右端に設置されている。
室外機に手足を乗せると、そのま
ようとす。手を摺り越え、飛び降り
次の瞬間、隣の部屋のベランダから
左腕が伸び、瑛美の右手を強く掴む。
その腕の内側に、ミヤコグサをモチ
フにした大きなタウーが彫られてい
る。
瑛美が顔を向けると、マスクを外し
髪色や髪形・メイクも全く別人の容
姿の篤瑠が、心配そうな表情で瑛美を
見つめている。

※瑛美は気付いていない

篤瑠「何やってるんです！危ないですよ！」

タイトルの文字の真下に『Let's knock
on the door to TOMORROW』と書か
れている。

○ エンドロール

○ 救急病院・千原の病室（夜）

千原、病室のベッドで上体だけ起こし
ベツド脇の丸椅子に座った望海と

抱き合っている。出し、望海の肩を
千原、何かを思い出し、望海の肩を

千原 「そつと抱き離す。紙、ありがとうな。

望海 「あれのおかげで、少し落ち着けた」

望海 「手紙？ なんのことで？」
千原、一瞬不思議そうに望海を見て、

ベツド脇の封筒を手に取り、望海に
手渡す。

千原 「え？ 何言ってるの、これだよ、これ」
望海、手紙を受け取ると、広げ、読み

始める。
次第に、表情に不安が広がっていく。

望海 「（震えた声で）なに…これ。私、知ら
ない」

千原 「千原、驚き目を見開く。
「は？ 嘘だろ？ 差出人、お前になってる

望海 「望海、激しく首を横に振る。
「本当に知らない！ 私の字じゃないもん

千原、これ！」
千原、何かを思い出すように一瞬硬直

する。

※ ※ ※
（フラッシュ）※ ※ ※

千原の病室に、手紙の入った封筒を
届けに来る看護師姿に変装した篤瑠。

※ ※ ※

字幕
『悔い改めろさもなくば全部壊す』

千原、呻き声のような悲鳴をあげる。
千原、望海から手紙を勢いよく取り
上げると、手紙の隅々を読み返す。
ふと悔しいと『くやしみの表
揺れに違和感を覚え、各列の
縦読み違和感を覚え、各列の
の縦読み違和感を覚え、各列の
文字目

【完】